



くさか景子の

ちよっ

と

よろしいですか！

毎月発行 県政情報誌 2007年 12月 Vol.7

What's
New?

茅ヶ崎海岸の浸食問題を探る 相模ダム見学バスツアー報告

11月19日、寒風の中、くさか景子一行35人は、相模川を上り、約50キロ先の相模湖の浚渫現場を見学しました。神奈川県では、昨年から、10年計画で、相模湖の砂を浚渫して、年間3万立方メートルを最も浸食の激しい中海岸に運び、養浜しています。この9月の台風でさらに砂の流出がありましたが、県では、10年間で砂浜幅を50メートルまで回復しようと、年間2億円をかけての事業を行っています。

1. 相模大堰

相模川の河口から12キロ上流地点に設置され、1日最大取水量130万立方メートルの水道水を取水する施設です。神奈川県営水道、横浜市営水道、川崎市営水道、横須賀市営水道へ、水道水として供給しています。また、相模川の代表的な魚類の一つアユの遡上や降下がしやすい魚道と、ヨシノボリのような底生魚や遊泳力の小さな魚類の副魚道を設置し、遡上魚を誘導するための呼び水水路を併設しています。

2. 置き砂

相模川の土砂環境を正常にし、流域の山、川、海までの土砂の流れを回復するため、相模川河口から19キロの地点で、「置き砂」試験を行っています。高さ約1.2メートル長さ20メー

ルの細かい粒の砂を置き、土砂の移動範囲や水質を調べ、さらに、石の付着藻類や底生生物などを調査しています。今は実験段階ですが、今後、城山ダム直下流に用いる置き砂の土砂は、相模ダム上流のものをもって来るそうです。

3. 磯辺頭首工

相模川の水利用は、上流は主に発電用水、中流部は農業用水、下流部は水道水として利用されています。磯辺頭首工は、農業用水を用水路へ引き入れるための施設の総称です。

【茅ヶ崎海岸の浸食実態】 昭和29年



【中海岸大きく後退】 平成17年



4. 相模湖浚渫現場

昭和22年にできて以来、相模貯水池には、ダムの宿命である堆砂が進んでいます。浚渫船団バックホウ船により、水中掘削で取り除きます。それを土砂運搬船で運び、陸揚げ場で、さらにバックホウでダンプトラックに積み、仮置場に運び、乾かします。年間25万立方メートル浚渫し、その土砂は、建設骨材や埋め立てに利用され、茅ヶ崎中海岸にも養浜対策のため、そのうち3万立方メートル運ばれています。

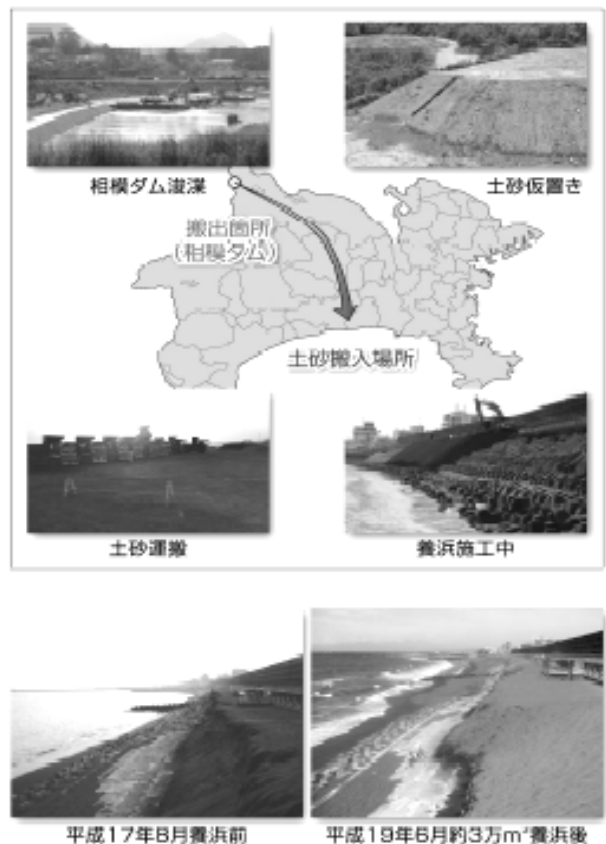
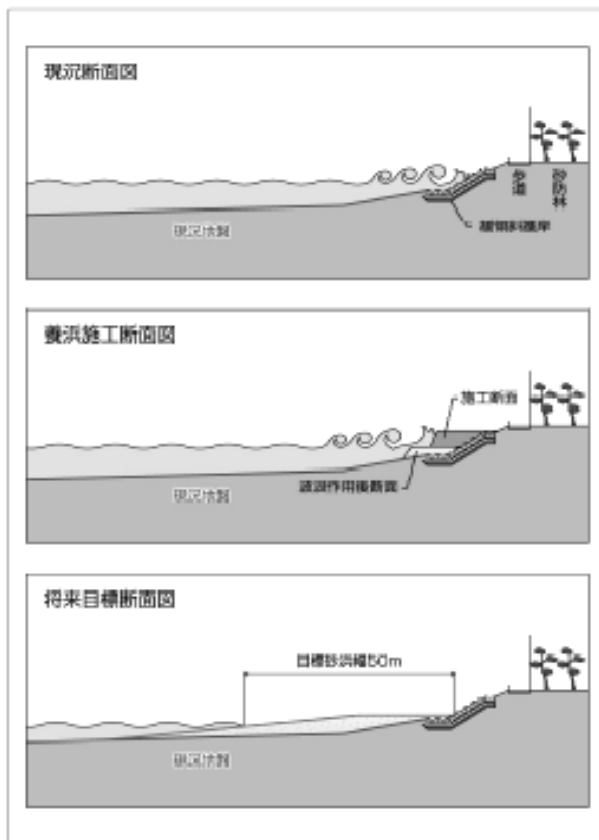


バックホウの前で

茅ヶ崎海岸中海岸地区の養浜事業

5. 水道水がくさい原因

昭和22年に相模湖、昭和40年に津久井湖が建設されました。現在は、神奈川県民880万人の約90%の水ガメとして非常に重要な水資源となっていますが、昭和30年代後半からの高度経済成長に伴い、湖周辺や流入河川地域の住宅化や観光地化のため、湖内の富栄養化が進み、昭和47年に藻類が異常増殖し、アオコが発生しました。それ以後毎年夏、アオコが発生し、その影響で、水質の悪化、カビ臭、さらには観光地の景観の問題も生じています。その解決には、人造湖の相模湖や津久井湖は、天然湖と比較して、湖の成因、地形的な条件流域の自然や社会的条件が異なるため、湖沼の特性に応じた研究を行う必要があります。



資料提供 藤沢土木事務所港湾課